



# 主の栄光を語り伝えよう

あかし  
信仰の体験談・証言のページ

2019

## Declare His Glory

『ある男の遍歴』(いのちのことば社)は、イエス・キリストを救い主と信じた男に働いた、神の力強い導きを証しする書です。今回は、その最終章としての証言をお届けします。



「ある男」の家族4世代の集い(於 西札幌教会 2017年8月)

「ある男の遍歴」反キリスト者として七転八倒した日々……

二〇一九年四月二十一日イースターの早朝、ある男が大きく息を吸った。居合わせた家族は顔を見合わせた。検温をするためナースが入室。「今日は素晴らしい朝焼けよ!」「ある男」が神の招きに与った瞬間だった。それは厳かで温かく、家族はその「時」を感動と喜びをもって受け止めた。男が、その百年の命を見事に生ききつたからである。

時は、一九七六年に戻る。キリスト教出版社の「ある男の遍歴」と題する長編実話が出版された。それは、同社が発行する月刊誌『百万人の福音』に二年間連載されたものを一冊にしたものであった。そこには「ある男」の、人にはあまり知られたくない、話したくない過去の出来事が赤裸々に書かれている。それは、激しい反キリスト者だった一人の男がキリストの福音に触れ、クリスチャンとなるいきさつの記録である。同時に、二十五年にわたる夫婦間の思想と信仰に根をもつ軋轢(けんりく)が神の愛によって和解に至る、クリスチャンである妻の祈りの証言でもある。

男は、青年時代、新国家建設の希望に燃えて満州に渡った。しかし、敗戦と共に夢破れ帰国。面識のないままに結婚した妻はクリスチャンだった。

北海道の田舎町で引き揚げ者としての生活が始まった。行商しながら共産党に入党。地元で町議を二期務めるも、党の武闘路線に反発し離脱。その後、札幌に移り、事業に専念する。

しかし、そこで味わったのは、借金・破産の連続という苦杯であった。一方妻は、どんな状況でも愚痴を言うことも、動揺することもなかった。

男は、自分に対する寄り添いを妻から感じ取ること

がができず、夫婦の心の不一致に苛(いら)だち、妻に冷たく当たることもあった。そして、妻の信仰が疎(そ)ましくなり、あろうことか、妻の通う教会に火をつけようと考えた。

そのような七転八倒(ななよちかた)の生活の中で心が温かくなった出来事は、長男の北海道大学合格だった。男は、本人以上に期待に胸を膨らませ事業に精を出した。ところがその息子は、大学一年の秋に脳腫瘍(のうしゅよう)を患(う)ず。医大の教授もお手上げの状態、治療の甲斐なく、一年余の闘病後、逝去した。

暗くなった家庭のために、男は再奮(さいふん)起し、札幌の中心部に宝石店を開業。しかし、開業の喜びも束の間、店舗がもらい火で消失してしまふ。それは、死者の出る大きな火災だった。

男は、度重なる試練に打ちのめされた。光がまったく見えず、これから先いっただいどうなるのか……と。そんな失意のどん底にいた時のことである。雪の降る夜、風呂敷包(ふろし敷)みを背負った人が火災見舞いに、と訪ねてきた。救世軍の北海道の責任者、救世軍士官(伝道者)の伊藤国義(いとうくによし)だった。

男は、キリスト教の人だから、妻に用事だと思ったが、伊藤は、男に会いに来たと言ふ。届けられたのは「社会鍋」の資金による一枚の毛布と、初めて感じたキリストの愛であった。

以来、男は、伊藤国義・千代子夫妻の姿に真実の夫婦愛を知った。キリスト教に目覚め、札幌北光教会にて求道し、キリスト者として生きるべく受洗に至った。男五十歳のことだった。

「神に喜ばれる商売」から、神に喜ばれる人生を届ける牧師へ……

焼け跡から再び商売をし、伊藤先生の教訓「神に喜ばれる商売をするように」を会社経営の基本精神として忠実に守ったところ、会社は豊かに祝福された。

やがて『ある男の遍歴』が出版され、以来全国各地で信仰の証言をしてほしい

「神の恵みは千代に」父・立石賢治の人生を通して立石貴美子

信仰の道、それは、神の栄光が現される道です。この「ある男」は、私の父、立石賢治です。神の不思議な導きは、父のみならず、私と夫にも及びました。キリストの香りを届けてくださった伊藤夫妻の送別集会が私の実家であり、私と夫も出席しました。その末席で、「まず神の国と神の義とを求めなさい」(マタイによる福音書6章33節・口語訳聖書)という聖書の言葉が私の夫の心に入り、救世軍札幌小隊(教会にあたる)に出席するようになったのでした。夫は初めて小隊に行ったその場で回心の祈りをし、キリストによる新しい命によって生かされた。

かつて教会に火をつけようとして考えた者が、信仰に生きる者と変えられた。そして、イエスの復活を祝う朝、家族に見守られ、天国に凱旋(がいせん)したのだった。

「私の近くの救世軍を紹介してください。」「キリスト教についてもっと知りたいです。」「『ときのことえ』の購読を申し込みます。」

ご住所

ご氏名

ご住所



100歳の敬老祝い。指方牧師より祝福を祈っていた。

教会を建て、伝道の拠点をもつことへと導かれる。順調だった事業をたたみ、献身の決意で農村伝道神学校に学ぶため二人で上京した。六十歳秋のことだった。

新たな出発は幸せこの上ない夫婦の姿となった。しかし、妻は、年明けに風邪をこじらせ、それまでの疲労も重なったのか、大病院の治療もむなしく、二月に召天。「夢であるならば」と思う出来事であった。失意の中、男は妻の骨箱を下げて、札幌に帰った。多くの人々は、学校にはもう戻らないだろうと思っていたが、妻と誓った献身を貫くため男は学校に戻った。心労と体力の限界を抱えての勉学の日々であった。

「先に一人息子を失い、今また妻を失い、人間の生涯は涙の谷間を歩いているようなものと言われるが、夜半の涙は枯れ果てることはない」

「このようなかですべてを主にゆだねつつ、『光栄あるイエス・キリストの証人として福音宣教に歩むことができるように』とただそれのみ祈りつつ学んだ」と後日、男は書いています。

三年の学びを終え、伝道師として一年間、月寒教会で奉仕した。伝道者生活の

始まりであった。牧師の試験に受かり、自宅に「西札幌教会」の看板を掲げた。開拓伝道の開始である。信徒は誰もいない。苦闘の日々が始まる。涙あり、笑いありの開拓伝道奮闘記が続く。教会の標語が掲げられた。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」(ローマ人への手紙12章15節・口語訳聖書)

「恐れるな。語りつづけてよ。……この町には、わたしの民が大ぜいいる」(使徒行伝18章9、10節・口語訳聖書)

御言葉(ごご)が前に後ろに力となつて男を支えた。

やがて自宅の建物は古くなり、新会堂建築の必要が出てきた。男はその時七十七歳。周囲からは年齢、体力からみて心配や懸念の声も多かったが、教会員一致の祈りが献げられ、多くの支援者によって献堂するに至った。堅固な土台を据えた後、男は、更なる熱心をもって教派を超え、国を超え、海外へと足を運んだ。

その後、自伝統編『ネグエブの川』を一九九四年に出版。前書からの十八年間は、信仰の戦いもあった。その書き出しに、

「ある男は七十五歳になりました。いつの間にか……こんなに歳をとって……わが

ことながら驚いています。それほど私は自分の人生を無我夢中で過ごしてきました。この間『ある男』は、ただ一筋にキリストへの道を全力疾走(いきそう)いたしました。この地(札幌)で開拓伝道(でんどう)を始めて十年、『ある男』はもって生まれた性分(しょうぶん)とうしましうか。猪突猛進(ぶつとくもうしん)の壁に当たってはじめてそこに壁があったことに気がつくように、相も変わらず挫折を繰り返しながら今後さらにもっと激しく走り続けたい、それは一途に福音が広がることを願うからです。『主よ、どうか、われらの繁栄を、ネグエブの川のように回復してください。』(詩篇126篇4節・口語訳聖書)

そのような思いで福音が北の果ての隅々まで伝わることを夢に描き、神が実りの秋を迎えさせてくださると確信し、キリストの鐘を鳴らし続けています。

本書はキリストに命を懸

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。